

# 長野工業高等専門学校 1 年生の学校生活に関する一 考察 : 中学校と普通科高校の学校生活と比較した ギャップに着目して

著者	小川 裕樹
雑誌名	長野工業高等専門学校紀要
号	51
ページ	2-3
発行年	2017-06-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1051/00001001/">http://id.nii.ac.jp/1051/00001001/</a>



# 長野工業高等専門学校 1 年生の学校生活に関する一考察 — 中学校と普通科高校の学校生活と比較したギャップに着目して —

小 川 裕 樹\*

## A Study on School Life of Nagano National College of Technology's First Grade — Focusing on the gap compared with the school life of junior high school and ordinary department high school —

OGAWA Yuki

キーワード：不登校，学生生活，高 1 クライシス，中 1 ギャップ，高専ギャップ

### 1. 目 的

文部科学省によると、平成 19 年度に不登校を理由に年間 30 日以上欠席した児童生徒数は 129,254 人であった。また、中学 1 年生における不登校生徒数は小学 6 年生の不登校児童数より一挙に増え、約 3 倍にもなる<sup>1)</sup>。不登校生徒数が一挙に跳ね上がる時期が中学 1 年生であることから「中 1 ギャップ」と呼ばれている。「中 1 ギャップ」とは、『小学校から中学校に入学した 1 年生が、大きな段差や壁を感じとり、中学校生活にとけ込めない状態』と児島ら<sup>2)</sup>は述べている。このような状況をつくり出さないように、学級活動の時間を使ってエンカウンターを取り入れている。エンカウンターとは、ゲシュタルト心理学の創始者である Perls, F.S の流れを取り入れ國分康孝が 1970 年代後半に創始した構成的グループエンカウンターである。

さて、中学校と高等学校はどうであろうか。先行研究等を調べてみても「高 1 ギャップ」という言葉はなく、高校 1 年生の不応適時期を「高 1 クライシス」と呼んでいる<sup>3)</sup>。伊藤らによると『「高 1 ライシス」は入学後の 4 月、5 月に友人ができず、教室に居場所がないと感ずること』と述べている。これは高等専門学校（以下高専）においても例外ではない。それどころか中学校から高専の方が環境の違いが大きく、ギャップを感じやすいのではないかと思う。以上の理由から本考察を行う。

### 2. 研究方法

公立中学校と、県立高等学校、長野高専の学校生活の特徴を調査し、比較する。

公立中学校は県内 2 校の学校生活を調査し、そこから中学校生活の特徴をまとめる。

県立高等学校は、各校で特色を出そうと学校の様子は様々であるので、長野高専と同地域であり、同学力と思われる普通科を 1 校選び、公式ホームページや勤務する教諭からの聞き取り結果をまとめる。

長野高専の学校生活は長野高専学生便覧<sup>4)</sup>や学生の様子からまとめていく。

長野高専 1 年生が感じるギャップを明らかにしたため、公立中学校は 3 年生、県立高等学校は 1 年生、長野高専も 1 年生を対象とする。

また、長野高専に入学した 1 年生 2 クラスを対象としてアンケート調査を行い、中学校生活と比較して入学後に戸惑いを感じている面を調査していく。

### 3. 結果

#### 3-1 長野県内公立中学校の学校生活の特徴

公共交通機関を使わず、徒歩あるいは自転車で通える範囲内にあるため、登校時間を早く設定しても登校可能である。朝の活動がある場合には 7 時登校となっている。活動のない生徒は概ね 8 時登校である。

朝の活動とは、主に部活動である。それ以外には、生徒会活動が挙げられる。朝の部活動について、長野県は 2014 年度まで部活動所属生徒を対象として朝部活が実施されていた。しかし、「ウォーミングアップやクーリングダウンの時間が十分にとれない」

\* 一般科講師

原稿受付 2017 年 5 月 19 日

「朝食から昼食までの時間が空き過ぎる」等の理由から「朝の自主活動」という名前に変更され、自主的な活動として位置づけられるようになった。なお、長野県教育委員会によると、2015年度の運動部加入率は男子が72.1%、女子が47.2%であると報告している。

午後の部活動の時間は時期によって変更され、生徒が安全に帰宅できるよう日没前に帰宅できる時間を設定している学校が多い。そのため、冬期は部活動の時間が5分という月も存在する。そこをかいくぐるために、「社会体育」というものが行われてきた経緯がある。社会体育は責任の所在が学校ではなく、保護者や地域の人の指導者に存在する。しかし、実際は部活動の延長として行っているところが多く、夜8時ころまで活動しているところもある。

学校生活の中身に目を移してみると、学級の日直当番や係活動、委員会には全員が所属し、学校のための当番活動を行っている。昼食は給食として位置づけられており、学校給食法では給食の目標として「食生活が食にかかわる人々の様々な活動に支えられていることについての理解を深め、勤労を重んずる態度を養うこと」<sup>5)</sup>等が掲げられており、大事な教育の時間となっている。

授業時間は50分と設定しているところがほとんどであるが特に規定はなく、各校校長によって定めることができる。学習指導要領<sup>6)</sup>の授業時数では50分を一単位時間として設定している。

中学校では多くの教科担任に授業を教わることになるが、授業以外の道徳や学活、清掃指導や給食指導等の生活指導を学級担任が担当することになるため、学級担任が学級に与える影響は大きい。

清掃は各自の分担が決められており、長野県のスタイルとして「無言清掃」を徹底している学校が多い。

多くの学校で三学期制を導入しており、登校日数は210日前後である。

### 3-2 長野県内A高校の学校生活の特徴

高等学校は多様化しており、一概に「こういう傾向がある」と述べことは難しい。そこで、ある高等学校を例として挙げ（以下A高校）、特色を挙げてみる。なお、A高校の学力は入学時の学力から長野高専とほぼ同等のものであると推測する。

A高校は進学校として知られているが部活動も盛んである。個人ではインターハイに出場したり、団体でも県内トップクラスの部活動が存在したりする文武両道を目指す高校である。

表1 公立中学校の学校生活

公立中学校	学校生活
7:10	登校
7:20-8:00	朝部活 or 朝の自主活動
8:15-8:30	朝読書
8:30-8:40	朝学活
8:50-9:40	1時間目
9:50-10:40	2時間目
10:55-11:45	3時間目
11:55-12:45	4時間目
12:45-13:40	給食
13:40-14:30	5時間目
14:40-15:30	6時間目
15:40-15:55	清掃
16:05-16:20	午後学活
16:30-18:25	部活
18:30	下校

表2 A高校の学校生活

A高校	学校生活
8:35-9:30	1時間目
9:40-10:35	2時間目
10:45-11:40	3時間目
11:50-12:45	4時間目
12:50-13:00	SHR
13:00-13:35	昼食
13:40-14:35	5時間目
14:45-15:40	6時間目
15:40-16:00	清掃
16:10-19:00	部活

朝の時間帯は部活動を行わず、自主的に活動している生徒が若干名いる程度である。放課後の部活動は、1年を通じて19:00までである。

校則はほぼなく、比較的自由な校風である。

授業時間は55分と設定されている。なお、県内は50分から65分までと授業時間の幅は大きい。

学級担任と生徒が顔をあわせる機会は昼食前に毎日一度、学活として設定されている。

清掃は毎日20分設定されており、各自割り当てられた場所を清掃する。

三学期制を導入しており、登校日数は213日(2016年度)。

### 3-3 長野高専の学校生活の特徴

1年生は学級により異なるが、前期は週に2日間が4コマ目(16:00終了)まで授業があり、後期は毎日3コマ目(14:20)までで授業が終わる。

清掃は月に一度、「清掃デー」という一斉清掃の日が設けられており、30分程度清掃を行う。学級によって、日直が教室の簡易清掃を行ったり、週に一度全員で清掃を行ったり様々である。

学級活動は週に一度設定されている。学級担任と学生が顔をあわせる設定されている機会は週に一度である。

二期制を導入しており、夏期自主研修期間を境に前期と後期に分かれている。登校日数は 176 日である。(2016 年度)

### 3-4 中学時とその後部活動を行っていない場合の学校生活の違い

中学校生活のそれぞれの活動時間を 100%として A 高校と長野高専の生活を%で示すと以下の表 4 及び表 5 のようになる。

公立中学と A 高校で大きな差があるのは、学活の項目であり、1 日あたり 15 分 A 高校の方が少ない。

公立中学校と長野高専を比較してみると、授業時間と学活の時間数に大きな差がある。授業時間は 1 時間あたり 40 分も増え、学活の時間は一日あたり 20 分少ないことになる。

表 3 長野高専の学校生活

長野高専	学校生活
8:50-10:20	1 コマ (1 時間目・2 時間目)
10:30-12:00	2 コマ (3 時間目・4 時間目)
12:00-12:40	昼食
12:40-14:20	3 コマ目
14:20-16:00	4 コマ目
16:15-19:00	部活

表 4 公立中学校と A 高校、長野高専の学校生活の比較 (部活動に所属していない場合)

	公立中学	A 高校	長野高専
登校	8 時	8 時 25 分*	8 時 40 分*
学活	朝・放課後 毎日 25 分	毎日 10 分 (40%)	週に一度 5 分程度**** (20%)
授業時間	50 分	55 分 (110%)	90 分 (180%)
総授業時間	300 分	330 分 (110%)	270 分** (90%) 360 分*** (120%)

(中学校との比較)

\*登校時間が定められていない場合は始業の 10 分前で設定。

\*\* 3 コマ目で終了時

\*\*\* 4 コマ目で終了時

\*\*\*\*週に一度しかないため、日割り計算。

### 3-5 中学時とその後部活動を行っている場合の学校生活の違い

公立中学で部活動を行い、長野高専で部活動を行っている場合は、3-4 で述べた学活時間と授業時間の違い以外では、登校時間に違いがある程度に留まっている。

### 3-6 高専入学後の戸惑いと友人のできるきっかけ

長野高専 1 年生 2 クラス 76 名を対象にアンケートを行い、長野高専に入学して戸惑ったことと友人ができたきっかけを調査した。アンケートの項目は 3-1 から 3-5 までを踏まえて以下の図 1 のようにした。

表 5 公立中学校と A 高校、長野高専の学校生活の比較 (部活動に所属している場合)

	公立中学	A 高校	長野高専
登校	7 時	8 時 25 分*	8 時 40 分*
下校	18 時 30 分頃	19 時 00 分頃	19 時 00 分頃
学校に拘束されている時間	11 時間 30 分	10 時間 35 分 (92%)	10 時間 20 分 (89%)
登校日数	210 日 + 休日の部活動	213 日 + 休日の部活動	176 日 + 休日の部活動

\*登校時間が定められていない場合は始業の 10 分前で設定。

\*\* 3 コマ目で終了時

\*\*\* 4 コマ目で終了時

1. 長野高専に入学して一番戸惑ったことは何ですか。  
A. 授業が長い, B. 給食がない, C. 清掃がない  
D. 学校終了が早い, E. 学活がほとんどない  
F. 担任の先生とほとんど会わない  
G. 授業の進みが速い H. 授業がつまらない  
I. その他 (自由記述)
2. 長野高専に入学して友人はできましたか。
3. 2 で「はい」と答えた人はどのようなきっかけで友人ができたか教えてください。

図 1. 入学後の戸惑い、友人関係に関するアンケート

前述している授業時間の長さについては半分以上の学生が戸惑いを感じている。授業について考えると、「授業が長い」が54%、「授業の進みが早い」が24%、「授業がつまらない」が3%であることから、実に81%の学生が授業について戸惑いを感じていることになる。

学活については、「担任の先生とほとんど会わない」が5%、「学活がほとんどない」が3%であることから、8%の学生が学活時間のことについて戸惑いを感じている。

表6 長野高専に入学し戸惑ったこと

授業が長い	41 (54%)
授業の進みが速い	18 (24%)
学校終了が早い	4 (5%)
担任の先生とほとんど会わない	4 (5%)
清掃がない	4 (5%)
学活がほとんどない	2 (3%)
授業がつまらない	2 (3%)

表7 長野高専に入学して友人ができたきっかけ

席が近い	14 (19%)
部活	14 (19%)
寮生活	13 (18%)
共通の趣味	9 (12%)
自ら話しかけた	7 (10%)
学校行事	5 (7%)
女子が少ない	5 (7%)
SNS	3 (4%)
物の貸し借り	1 (1%)
話しかけられた	1 (1%)
体育	1 (1%)

表8 公立中学校と長野高専の学校生活の比較（中学時代に部活動所属し、長野高専入学後無所属）

	部活動に所属している中学生	部活動に所属していない長野高専生
登校時間	7:00	8:40
下校時間	18:30	14時30分頃* 16時10分頃**
学校での拘束時間	11時間30分	5時間50分* (50%) 7時間10分** (62%)

\* 3コマ目で終了時

\*\* 4コマ目で終了時

また、「高1クライシス」の原因の一つに友人ができないことと述べられていることから、どのようなことがきっかけで友人ができるのかを調査した。

大部分の学生は、教室の「席が近い」ことがきっかけで仲良くなったり、寮生活や部活動等の学級以外の面で友人ができたりすることが窺える。

#### 4. 考察

中学校3年生とA高校で最も大きな違いは学活の時間で、A高校では中学校の40%の時間しか行われていない。それ以外の部分を比較しても、±10%の差であるので、大きな差は特に見られない。「高1クライシス」として感じるギャップは、学校生活の流れの中からは感じにくいことが言える。

それでは、中学校3年生と長野高専1年生の比較ではどうであろうか。中学校3年生と長野高専1年生の学校生活で差が最も大きいのは、授業時間である。中学校の50分に対してA高校は55分であり、長野高専では90分の授業時間を設定している。中学校と長野高専を比べると40分も多いことになる。また、一日の総授業時間は中学校の300分に対して、A高校は330分(+10%)、長野高専は長くても360分(+20%)であり、大きな差は見られない。

授業時間以外には、学級活動の時間も同様に80%の差がある。中学校では、毎日朝と帰りに合計25分程度設定されているのに対して、長野高専では週に一度であり、1週間あたりの時間も中学校の20%の実施に留まっている。中学生までは学活の時間にその日の見通しをもったり、連絡を聞いたり、翌日の予定を確認したりしていたが、それがなくなることによって自力で調べることが難しい学生は戸惑いを感じているようである。

また、学校での拘束時間は中学校よりも長野高専の方が少ない。時間にすると、80~160分の差がある。さらに、以下のパターンの場合はこの差が大きくなる。中学校3年生の時に部活動に入部していて、長野高専入学後に部活動に所属していない場合の学校での拘束時間である。この場合は以下のようなようになる。このようなパターンだと学校にいる時間は中学生のおよそ半分程度で、250~340分の差が生じている。

以上が、時間からわかる中学校とA高校の差、そして中学校と長野高専の差である。中学校3年生からA高校へ進学よりも、中学校から長野高専進学の方が大きな差があることが窺える。新しい人間関係

に加えて、これらの大きな差は想像以上に大きな壁であるように感じる。

友人関係について考察してみると、大部分の学生は席が近かったり、部活や寮で一緒になったりする機会の中で友人ができることが多いことがわかった。つまり、近くの席に気の合う人がいなく、部活に所属しておらず、寮で生活をしていない学生は友人を作りにくい傾向にあるのかもしれない。人間関係が希薄である中で、自分から話しかけることが苦手な学生も多くいる。学活の中で互いを知る時間や協力し合う時間を入学後早めに設定すること、席替えを多く行い多くの学生と触れる機会を作ることで友人ができやすくなるのではないかと考えられる。

また、中学校と比較すると長野高専は自由時間が多い。この時間を自分の成長のために有意義に使えるのであればいいのだが、実際は、ゲームをしている学生が多くいる。特にスマートフォンが普及している昨今、手軽にどこでも無料でゲームができてしまう。ゲームにはまってしまい、勉強に取り掛かれない学生も見られる。レポート等の課題は出されているが、時間があらずでなかなか計画的に取り掛かれない学生も目につく。

実際には時間の比較だけではわからない差も多くあると考えられる。中学校では図 2 のように仲間とコミュニケーションをとりながら楽しく学ぶというスタイルのものが多く、それと比較すると、筆者の経験からは高校や高専では講義形式の授業が多いように感じる。しかし、2015 年に中原ら<sup>8)</sup>が行った「高等学校におけるアクティブラーニングの視点に立った参加型授業に関する全国調査」によると、アクティブラーニングに取り組んでいる教科があると答えた高校は 75% に上り、多くの学校に広がっていることが窺える。このような傾向が続いていけば教授方法の壁は小さなものになるであると考えられる。



図 2 中学校の授業風景

長野高専では、教育理念、教育・運営方針等に沿って、「身につける学力・資質・能力（学習・教育目標）」を定めている。その中の一つに、『習得した工学分野の知識を基に、課題の達成に向けて自ら問題を発見し、それに対処するための業務を自主的・継続的かつ組織的に遂行する能力を身につける』とあり、さらに『自己の能力を把握し、その向上のために自主的に学習を遂行できる』とある。そのためには十分な自由時間が必要であるが、入学したばかりの 1 年生には大きな壁であり難しい課題であるように感じる。自主的に学習を遂行できない学生は、持て余した時間が無駄になるばかりでなく、マイナスな方向に働きかねない。何をやっていいのかわからない 1、2 年生の間は授業を増やしたり、最終授業後に強制的に復習する時間を確保したりしていかないと歯止めがかからないと感じる。

以上のことから、長野高専に入学した学生はそれまでの生活とは大きな差の中で新生活を迎えていることがわかった。そのまま学校に馴染めずに辞めてしまったり、居場所のないまま苦しい思いをしてしまったりする学生もいるかもしれない。名称をつけるとすれば「高専ギャップ」とでも言えるだろうか。教員はこれらのギャップを踏まえた上で、1 年生の間は学生指導や授業を行っていかなければならないのではないだろうか。

今後は、入学後の学生を対象として構成的グループエンカウンターを実施し、仲間づくりの時間を確保して効果を検証していきたい。

## 参 考 文 献

- 1) 学校基本調査速報, 文部科学省(2008)
- 2) 児島邦宏・佐野金吾: 中 1 ギャップの克服プログラム, 明治図書(2006)
- 3) 伊藤嘉奈子・工藤吉猛: 高等学校の新入生オリエンテーションにおける構成的グループ・エンカウンターの実践的研究(2012)
- 4) 長野工業高等専門学校. 平成 28 年度学生便覧(2016)
- 5) 学校給食法(2015)
- 6) 学習指導要領(2016)
- 7) 学校教育法施行規則
- 8) 木村充, 山辺恵理子, 中原淳: 東京大学- 日本教育研究イノベーションセンター共同調査研究 高等学校におけるアクティブラーニングの視点に立った参加型授業に関する実態調査: 第一次報告書(2015)